

司会 続いてメインプログラムの最後のコーナーになります。パネルディスカッション、協議というものは、今までの危機言語・方言サミットでも毎回行ってきてはいるのですけれども、今回初めて 10 代の方、つまり、言葉を受け継いでいく側の方にお話ししていただくという企画を立てました。ここでは受け継ぐということに関して、経験の中で日頃感じていること、これまで悩んだこと、そうしたことを是非皆様に聞いていただきたいと考えてのものです。何か特別な結論を導き出そうというのではなく、受け継ぐ側から見るとどういふことを感じているのか、どういふことで悩んでいるのか、それに対して、大人の側がどういふふうに接していったらいいのか、そうしたことを考えていただくヒントにと思って、この企画を考えました。

午前中の基調講演の中で、国立国語研究所の田窪所長が、間違っただけを余り厳しく指摘したりすることはやめたほうがいいとおっしゃっていました。これは実は以前、八戸の方言のイベントの時も若い人が「あまり間違っている、間違っていると言われると嫌になって、使いたくなくなるんだ。」ということを書いていて、それに通じる話だなと感じていました。今日は、実際にそういう言葉を受け継ぐという形で接している若い方の言葉を、是非受け止めていただけたらと思います。

また、今まで実はこの危機言語・方言サミットに海外から登壇者をお呼びしたことはなかったのですが、今回は初めて、ノルウェーから来ていただきました。ノルウェーの中の少数先住民族であるサーミの高校生です。サーミ語の中にも幾つかあるのですが、その中でも少数派である南サーミの言葉を受け継いでいます。少数先住民族であるサーミの中でも少数に当たる方です。

それではパネリスト、進行役の皆様、壇上にお上がりください。進行役は琉球大学の石原昌英先生をお願いしております。パネリストですが、まず、地元の宮古からは砂川姫奈多さんです。アイヌ語は聞き比べの時に登壇していただいた関根摩耶さんです。そして、ノルウェーから来ていただいたのは **Sara Kappfjell** さんです。日本語はできませんので、今回、英語で話していただきますけれども、お隣に通訳として、またサーミ教育の研究者として名古屋から長谷川紀子先生に来ていただいています。

ここでお話しいただくのは「危機言語・方言を継承するー継承を受ける立場から」というテーマで、最初にざっと自己紹介から入りまして、それぞれが自分たちの言葉を意識した経験、きっかけ、それからそれを学んでいく中で感じたこと。それから、こうだったらいいなと感じているところを話題にさせていただく予定です。

ここからは、石原先生に進行をお任せいたします。では、よろしくお願いいたします。

石原 それではメインプログラムの最後、「危機的な状況にある言語・方言サミット」の協議を始めさせていただきます。テーマは「危機言語・方言を継承するー継承を受ける立場から」としました。危機言語・方言の継承について語られる場合、継承活動をする大人側からのものがほとんどです。今日は逆に継承を受ける側の声を聞いていただき、何か結論を導くというよりも、大人の側の勝手な思い込みなどがマイナスに働いていることがないのか、立ち止まって皆さん自身で考えていただけたらと思います。

パネリストとしてお願いしたのは、私に近い側から、宮古の言葉の継承ということで、高校に通っている砂川姫奈多さん。そのお隣がアイヌ語の継承ということで、大学に通っている関根摩耶さん。そして、北欧のノルウェーから来ていただきました、南サーミ語の継承ということで高校



生の Sara Kappfjell さんの 3 名です。Sara さんのお隣には通訳を務めていただきます、サーミの教育を研究されている名古屋大学大学院の長谷川先生に座っていただいています。

ユネスコの消滅の危機度に照らし合わせますと、危機度の高い順にアイヌ語が「極めて深刻」、南サーミ語が「重大な危機」、宮古語が「危険」とされており、全て消滅の危機に瀕した危機言語と認定されています。アイヌ語と南サーミ語は国の同化政策によって、言語や文化が失われる危機に瀕し、その後、国の同化政策が変わりながらも、その prestige (威信)、価値の回復がされたとは言えない状況にあります。と

もに国や地域で見るとマイノリティー，少数派という存在です。一方，宮古の言葉は国の標準語推奨が行き過ぎて貶められ，やはり **prestige**（威信），価値が十分に回復されていない状況にあります。ちょうどサーミ語全体の中における南サーミ語のような存在で，マイノリティーの中にあるマイノリティーということが宮古語の場合には言えるかと思います。

それでは初めにパネリストの 3 名に簡単に自己紹介をしていただきます。それでは砂川さん，よろしくお願いします。

砂川 砂川姫奈多です。高校 3 年生の 18 歳です。私が宮古方言に関わったのは中学 2 年生の時に中学校でやった方言劇で，方言を初めて話したことから始まりました。今日はよろしくお願いします。

石原 どうもありがとうございました。次に関根さん，お願いいたします。

関根 イランカラテ。こんにちは。シシムカ ペツ ホントムタ アン ニプタイ
ピパウシコタン タ コアパマカフ クネ ワタネ カナガワケン オッタ カン ルウェ
ネ。

私は北海道平取町二風谷という，すごく小さな村みたいところで生まれて，そこは人口の 7，8 割がアイヌ民族，アイヌであると言われている場所なので，自分がアイヌであるとか，日本人であるとか，自分のルーツが何なのかとかも余り考えずに育って，その育つ過程において，後付けのような形で「自分はアイヌ民族なんだ」というのを自分の中で自分の強みに変えていけたと感じています。今日は一日よろしくお願いします。

石原 ありがとうございます。次に Sara Kappfjell さん，自己紹介をよろしくお願いします。

Sara 私の名前は Sara Kappfjell です。ノルウェーのトロンハイムからやってきました。年は 15 歳です。

長谷川 補足いたします。ノルウェーの教育制度の中では義務教育が 10 年生まであり、日本でいくと高校 1 年生ですが義務教育の最終学年の生徒です。彼女もサーミ言語とサーミ文化を小さい頃から学んでまいりました。

石原 ありがとうございます。さて、初めに、それぞれ自分の言葉や文化を意識したきっかけと、学んでいく中で見方がどう変わったのかについて、お話ししていただきたいと思います。それでは砂川さんから、だいたい 4, 5 分程度でお願いいたします。

砂川 私が宮古方言を意識したきっかけは、中学校 2 年生の時に宮古地区中学校文化連盟主催の方言お話パフォーマンス大会に出場したことです。そこで先ほどもやりました宮古方言版の狂言「附子」を披露しました。その劇を練習していく中で、標準語とは違う宮古方言の特別な意味の言葉とか、ニュアンスにとっても興味を持って、もっと学びたいなと思いました。

最初は、方言は祖父・祖母世代が話すもので、私たち若者は話さなくて当然だったり、あまり生活に関係ないものだったかと思っていたのですが、方言に関わっていくにつれて、宮古方言が消滅の危機にさらされていることを初めて知りました。そこで私たちのような若者がもっと宮古方言の面白さとか重要さに興味・関心を持って、継続、継承していくことが大切だと感じました。

石原 関根さん、お願いします。

関根 私は先ほども話したように二風谷という地域で育ったので、自分が、アイヌ語であったり、日本語だったり、いろいろな文化に触れて育ったと思うのですが、二風谷という地域から離れたのが中学校 1 年生の時です。その時にそれまでもアイヌが少数であるとか、マイノリティーに置かれているということはいろいろな話の中で理解はしていて、そこを自分の中ですごく引け目に感じていたのが小学校高学年ぐらいでした。中学校で二風谷の外に出て、登別というところに行ったのですが、その時に自分は全くアイヌ文化を話さなくなったし、アイヌだということを周りに言わないで、日本人として隠して生活していて、改めてアイヌを意識したきっかけは曖昧なのです

が、そこで反対の意味でアイヌだということを意識したのかなと感じています。

ただ、幼い頃、保育園の頃とかはアイヌ語も日本語も、余り関係なく両方素直に使っていたし、それがすごく私の中で大切な思い出であって、自分の地域の人であったり、大事な人、私にたくさんのことを伝えてくれた方が大事にしているアイヌ文化を隠さなければいけない中学校、高校の生活というのが、自分の中で「なんで自分はそうやってアイヌであるはずなのに、アイヌとして生きていないのだろう」みたいなことを疑問に持ち始めて、高校後半からアイヌの勉強をもう一度再開したという感じですね。

あとは触れたきっかけというのが何歳からとかはなくて、本当に父はアイヌ語をずっと勉強している人だったし、いまも勉強して教えたりもしています。そして、母はアイヌの工芸家。祖母も叔父もみんなアイヌのことをやっている家族の中で育ったので「アイヌというのは人という意味なんだよ」と育てられて、アイヌ語でアイヌというのは人という意味なので、ほかの日本人の方が「ああ、アイヌの子供なんだ」と言うのに疑問を抱くような子供で、触れたきっかけというよりは生まれた時からアイヌ文化と一緒に育ってきたと感じています。

石原 ありがとうございます。それでは、Saraさんにも同じ質問で、サーミの言語とか文化を意識したきっかけと、学んでいく中で自分の言語や文化に対する見方が変わったのかについてお話ししていただけますか。

Sara サーミ語やサーミの文化を学ぶことはとても自然なことです。なぜかというところ、サーミの家族の中で生まれて、特に父がトナカイの放牧をしているサーミの家族の中で育ったので、自然に学校でサーミ語を学んだりしています。ですから、特別に何かきっかけがあったとか、そういうものではなくて、自然に生まれた時からそういう文化の中で育ってきました。

石原 質問ですけれど、幼稚園、小学校からサーミ語を習っていたということですか。

長谷川 Saraの祖父や父親がサーミ語を話しますし、サーミ学校一少し遠くて離れているのですが一小学校からその学校に一定期間行って、サーミ語を学ぶという経験

を1年生の時からずっとしています。

石原 砂川さんと関根さんに今との関連で質問ですが、小学校、中学校、高校まで自分の地域の言葉とか文化を学校で学ぶチャンスはあったのですか。

砂川 学校の教育としてはなかったです。こういう特別な何か組織とか団体が主催してくれて、やっとそれに参加することで学ぶという感じです。

関根 私は保育園の頃から親子のアイヌ語教室というのに通っていたのと、教育機関の中では、二風谷小学校というところは先ほども話した、人口の大半をアイヌが占めているような地域の小学校なので、学校自体で学ぶ時間とかは少なくとも、私が小さい頃は小学校の半数ぐらいはたぶんアイヌ語教室とかに通っていたと思います。それでアイヌ語と一緒に学んでいたり、学校でも年に何時間かアイヌ語を学ぶ活動とか、いろいろな活動があったりして、そこで伝統的な踊り、文化、言語とか、楽器をやったり、実際に何か作って、それを利用して何かをやったり、あとは、ピパ貝を千歳というところに採りに行って使ったり、本当に私の学校は恵まれていて、小学校まではたくさん触れる機会があって、みんなそれこそアイヌ、日本人余り関係なく生活していたと思うのです。でも、中学校はほかにアイヌの人がいるわけでもない、私以外にアイヌの人がいても分かっていなかったりもすると思うのですが、基本的にアイヌの活動をされていたという人がいないような中学校に行って、やはりそこではアイヌの活動がほとんどなくて、1回だけ課外授業みたいなものでアイヌの博物館に行くぐらいの感じでした。中学、高校では歴史の教科書に1, 2ページ出てきて、アイヌ民族はこんなものだという、過去に存在していた人であるように載っているぐらいの感覚でした。

石原 ありがとうございます。それでは、Saraさんの場合は少し違うかもしれませんが、言葉を学んで分かるようになってから、年配の方と話す機会が出てきたかと思います。年配の方と話せるようになったことから、何か感じた事はありますか。

砂川 私はまだ会話ができるぐらいに方言が分からなくて、知識も少なく、まだ勉

強中ですがけれども、自分の祖父母と会話をしている中で、新しい初めて聞いた方言とか「え、どういう意味なんだろう」と興味を引かれる方言をたまに耳にすることがあって、「これはどういう意味なの?」とか「どういうふうに言うの? イントネーションはどんな感じなの?」とか、そういう祖父母との会話の中で方言を使ったり、教えてもらったりという機会がとて多くなりました。教えてもらって「あ、こういう意味なんだ」と思って、次にまたそれを覚えて会話の中で入れたら「そうだよ、そういうことだよ」とか、いろいろ教えてもらって、今、積極的に方言を話す努力はしています。

石原 それでは、関根さん。

関根 きっとアイヌの場合は、いまの祖父母の年代でも流暢^{ちよう}に話せる方は本当に少ない現状になっていると思っています。私は本当にアイヌ語は流暢に話せないし、まだ勉強中ですが、祖父母と話して感じたことというよりは、ちゃんと私も勉強してアイヌ語で誰かとコミュニケーションをとって生活してみたいという欲望がきっとあって…。

私が小さい頃、保育園の頃とかに萱野茂さんという方や中本ムツ子さんのところにいつも父や母と一緒に通っていたのですが、その方々が結構アイヌ語を話せる方で、私がまだ保育園児なのにアイヌ語で話しかけてくれていました。アイヌ語を話している二人の口元を思い出として覚えているみたい。それが私の中ですごく大切なものであって、そういう感覚を私だけではなく、私より下の世代の方にも持ってもらいたいので、私たちがちゃんと話せるようになって、実際にたくさんの思いを持ってもらえる方が増えるようにしていけたらいいなと考えています。

石原 ありがとうございます。それでは、Sara さんお願いします。

Sara 私の場合はサーミの村から少し離れた都会の中に住んでいますので、私にとってはサーミ語を学ぶことはコミュニティーとつながることにはなるのですが、実際に年配の方々とお話しするのは、やはりノルウェー語でとなります。サーミ語で年配の方たちと話すきっかけが増えたという経験は、実は正直言ってないんです。

長谷川 補足させていただきますと、ノルウェー、北欧諸国は、サーミの人たちに対して、1850年代から1960年ぐらいまで同化政策を行っていきまして、ほとんどのサーミの人たち、特に南の方のサーミの人たちはノルウェー語を話すようになってしまいました。そして、彼女たちの代になって、戦後になって、ようやく学校教育でサーミ語を学ぶことができる世代になったので、やはり年配の人たちとも基本としてはノルウェー語で話すという環境にあるということです。

石原 祖父母や両親はサーミ語を話しますか。

Sara そうですが、遠くに住んでいるので…。私にとってサーミ語は学校で学んで、学校で話しますが、祖父母とはノルウェー語で話す方がより自然です。

石原 こういう質問をしたのは、沖縄本島の中部の方で熱心にうちな一ぐちの継承をやっている団体がありまして、その若い人たちに聞いたら、ある一人が話をしていたのですが、うちな一ぐちを学ぶようになって、高齢者と話すチャンスが出てきた。そこで高齢者が、より深いところで自分に



対して心を開くということが起こっているのではないか。これは日本語で話していた時とちょっと違うと感じたというのがあったので、このような質問をしました。

それでは次の質問です。自分の言葉というか、みゃーくふつ、アイヌ語、サーミ語を学び、継承していく中で悩んだこと、困ったこと、つらかったことなどがあれば、是非お聞かせください。

砂川 私は実際、宮古方言にとっても関心、興味があるのですけれども、やはり私と同学年とか周りの友達とかは、私のように方言には興味がなかったり、あまり関心がなかったりします。「おじいとかおばあが使っているんじゃない？」ぐらいの気持ちの

持ちようで、私が祖父母と話して覚えた方言とかを、実際に友達とも使って会話してみたいなと思うのですが、友達も分からないからそれができなかつたりするので、せっかく覚えたり、使ってみたいなという場面でもできないのが悩みだったり、葛藤だったりします。

関根 きっと甘いし、軽いような答えになってしまうと思うのですが、私はそんなに今も悩んでいなくて、今までもそんなにアイヌであるからと悩んだことがないんです。今はすごくアイヌとして生まれて幸せだなと感じています。それはアイヌだからこそ、アイヌとして見られるのだから、人として格好よく生きたい。正しく生きていたいと思わせてくれるのもアイヌ文化、アイヌ語なので、そうやって私を強くしてくれるアイヌ文化というものに感謝しているし、アイヌだからと余り悩んだことはありません。両親も私に「アイヌのことをやりなさい」とは一言も言ったことがないような両親です。やっぱり私はアイヌ文化が大好きで、そこにたくさんの思い出があって、今こうやって、こういう場にも立たせてもらっています。

なので、悩んだというよりはこれからすごく楽しみなことが一杯で、先ほどここで語られていた川上さやかさんとかもですが、私は同年代ぐらいの若いアイヌの人たちが最近すごく頑張っていて、私にいろいろなことを教えてくれる、そういう人たちと今こうやって一緒にいられること自体がすごく、いつもしみじみとうれしく感じたりします。本当にやりたいことも楽しみなことも一杯です。

ただ、今まで悩んだというのはやっぱり中高とかで、平取から外に出たときに、私は差別もいじめもされたことはないのですが、やっぱり歴史の授業のアイヌのところで「アイヌって毛濃いよね」、「顔濃いよね」、「狩猟ってなんかすごい怖いよね」みたいな話をされていると、全然みんなちゃんとしたアイヌというのを知ってくれていないのかなと思って、余計に言えなくなったみたいな経験はあります。でも、私の周りの人たちはみんな、どちらかというといアイヌであることに何か役目を感じて、頑張っていて、そこに誇りを持って生きている姿を見せてくれたので、私もそうなりたいなと今は思って、悩みは今もなく、楽しくやらせてもらっています。

石原 ありがとうございました。Saraさん、どうぞ。

長谷川 Saraさんは2点、彼女の問題を話してくれましたけれども、まず、彼女の問題の前にノルウェーの場合、ノルウェーの国はサーミの人たちとノルウェー人によって構成されていて、サーミの方たちは先住民族として国を形成しているということで認められています。そのおかげで彼女たちは学校教育でサーミ語を学ぶ権利を持っています。しかし、やはりその状況というのは、特に彼女の地域、南サーミではなかなか改善されない部分があります。

Sara 私は学校でたった一人、南サーミ語を学ぶ生徒で、1年生の時には南サーミ語を教えてくれる先生がいたのですが、次の年から通信教育で学校に週に1回とか2回、ほかの子供たちと離れてSkypeで南サーミ語を学びます。その環境というのが、教室の隅にコンピューターを置かれて、みんなにからかわれてしまったり、周りがうるさくてなかなか聞き取れなかったりして、そういう環境がとてつらかったです。

長谷川 まず、サーミ語を学ぶ上では、学ぶ事に対して彼女はとてもポジティブですが、学校の理解がまだまだ足りないところを今悩んでいます。

Sara もう1点は言語というより民族の問題ですが、地域の中でやはり私たちに対して少し偏見を持ってしまったり、そういう態度をとられてしまったりしたことがあるんです。特に一つ新しい経験としては、昨年、国の建国記念日、National Dayがあつて、その時にパレードがあつて、かわいらしいコルトでパレードに参加したのですが「あなたサーミなの」とか、ある年配の男性からは罵^{ののし}られたりして、ものすごく不快な気持ちになったことがあります。ただ、今の若い世代、特に小さな子供たちは、私たちに対してそういうものは全くなくて、「あなたサーミなの？ とてもきれいなね」、「かわいいね」と逆に肯定的に接してくれているのがとてもうれしいです。

石原 ありがとうございます。それでは、若者同士ということですが、ここまでそれぞれの体験に基づいて語っていただきましたが、お互いの発言を聞いていて、もう少し聞いてみたいこととか、確認しておきたいことがあれば発言してください。3名の中で何か「これについて知りたい」とか、もしくは「こういったときはどうしているんですか」というのがありましたら、お互いに質問してみてください。どうぞ。

長谷川 あらかじめ実は事前に Sara と話をしている、彼女が是非聞いてみたいという質問があったのでいいですか。彼女は「あなたたちは教室か学校で、ほかの友人と自分が違うと感じたことはありますか」と聞いてみたいということでした。彼女はそういう経験を実



はしているものですから、特に学校で自分は友達たちと違うという経験をしたことはあるか、彼女がどうしても聞きたいと言っていました。

砂川 私はそういう経験はないです。宮古島という一つの島の中なので、みんな同じ感じというか。地区とか地域がちょっと違うのですが、そこでそういう偏見というか、そういうことは1回もないです。

関根 私はいま大学に通っているのですが、大学が北海道というアイヌが元々住んでいた地域周辺ではなく関東の大学、すごく離れたところに行っているの、アイヌという人はきっと私一人です。そこで今私の行っている学部は結構、マイノリティーに興味のある学生が多い学部で、いろいろな海外の先住民の問題であったり、難民の問題であったりとか、たくさんの問題意識を持って一所懸命勉強されている方が多いところだけに、それはすごくプラスなことでもあるのですが、そこに私が入ったら、皆さんの研究対象になってしまうわけです。違うと感じるとか、そこと合っているか分からないのですが、やっぱりいろいろな方がいて、自分が関わろうとしている、ほかの民族にどう関わったらいいのか、私にアドバイスを求めてくる方もいれば、逆にもう余りよろしくない質問というか「アイヌなのに大学来られてすごいね」、「学校って行ったの?」と質問をされる方もいて、そこでやはりアイヌへの認知度が低いな

というので、私は一人だなと感じることがあります。

この間も大学でゲストとまはでいかないのですが、少しだけアイヌの授業をさせていただく機会があって、広場みたいなところで皆さんと一緒に、歌や踊りを教えてほしいと先生からお話を頂いて、そうやって広場のところで授業を受けている生徒と踊りをしていたりしたら、それを周りが動画に撮って「何あれ？」と言っている。私は衣装も着ているし、「アイヌのことです」と大きい声で言っているのに、アイヌだと知っていながらも、それだけ意識の高い学校であるはずなのに、その人たちが、アイヌが日本人であるかも、どういうものなのかが分からないというところが問題でもあり、私は一人かなと感じたところかなと思います。

石原 私が琉球大学で学生に授業をする時に、たまに「沖縄の中では、沖縄の人たちはマイノリティーではない。沖縄の中ではマジョリティーだ。しかし、北海道のアイヌというのは必ずしもそうではない。北海道の中では、人口的にはマイノリティーである。そういう中でアイヌであるということを隠してきた人たちもいる」という話をしています。沖縄の中ではそういう必要はない。140万県民がいると、恐らく100万以上は沖縄県出身者ですので、そういった意味ではマジョリティーではあります。

関根さんと砂川さんから、Saraさんに対して何か質問とかありますか。

関根 サーミの学校、小学校の低学年ー1年生からですかー通われる学校というのは、サーミ語で授業を行ったりするのか、その学校がどういう制度なのかを知りたいです。

Sara 通っている学校は少し特別なプログラムで通制ではなくて、年に6回なのですが、1週間の単位でその学校に招かれます。1週間、同じサーミの子供たちと一緒に南サーミ語を学んだり、それからサーミの文化を学んだりします。どちらかという教室の中にいるというよりも、自然の中に行ってトナカイの放牧の体験授業をしたり、自然の中でどうやって生きてきたのかという精神性のようなものを学んだり、また、今身に着けているベルトなどの技巧を習ったりする、特別なプログラムです。やはり南サーミ地域は広い地域の中に少ないサーミの子供たちがいるものですから、普段は通常の学校に通って、その学校から週に何回かサーミの言語を学んで、そして年に数回、そのような体験学習というのか、そういう学校でたくさんの思い出を作ってきた

した。

石原 砂川さんから何か。関根さんにでもいいですし、Sara さんにでもいいです。

砂川 では、関根さんにちょっと聞きたいことがあるのですが、アイヌの人たちは北海道の一部にしか存在しないのですか。それとも北海道各地域に住んでいるのでしょうか。

関根 今はきっと本当に全国各地というか、これだけグローバルな社会なので全国だったり、全世界にもたくさんいると思います。ただ、元々住んでいたのが北海道だったり、東北の方だったり、樺太の方だったり、この辺りなのですが、今は本当に私みたいにアイヌとして生きたいと思っている方がいろいろな地域に住んでいると思っています。

質問返しみたいになってしまうのですが、いいですか。各言語を学習しようとしていたり、学習している若い人たちが何か一緒にできるコミュニティーみたいなものとか、集まれるものがあるのかを聞きたいです。アイヌの場合は頑張っている若い人たちがたくさんいるんですが、ただ、私みたいに違う大学に一人で行ったとなると、どこのコミュニティーにも属していなかったりして、若い人たち同士で何かしようという試みが少ないのかな、私に関東にいるから余計だと思いますが、そういうので若い人たち同士で集まって何か一緒にやることがあるのかを聞いてみたいです。

Sara そういうコミュニティーというものはまだないと、私がまだ 15 歳というところもあるかと思います。もちろん、サーミの学校で知り合ったお友達はあるけれど、実はものすごく遠いところにいるので、学校で会うことはできるけれど、そこで何かをするようなことはできないし、町の中では私は一人という感じで、まだ高校 1 年生なのでそこら辺のコミュニティーはまだないです。

砂川 私も Sara さんと同じですが、余り友達とか同世代が集まって、宮古方言を継承しようとか、伝統的なことを特別に取り組んで継承していこうという取組は今までないかもしれません。でも、できたらいいなと思います。

石原 関連しますけれど、先ほど言いました、沖縄本島中部の若者のグループにインタビューした時にその中の一人が、自分が一緒に何かしようということを高校のクラスメイトとかを誘った時に、沖縄風な言い方をしますけれど「なんで今更、そんなことするばー」みたいな形でまったく興味を持ってくれない。「なんで今更、沖縄の言葉をやるの？」という質問がされるそうです。

そこで3名に質問ですが、なんで今更、宮古方言、なんで今になってアイヌ語、なんで今になってサーミ語、もっとみんなが共通して使える言葉があるのに、なんで自分たちの言葉を学ばなければいけないのという同じ世代からの質問に対して、どういう答え方をしますか。

砂川 実際、今の段階で危機的状況にある言語です。指定されて初めて、自分たちが生まれ育った地域とかの方言の大切さに気付いてくると思います。人に言われて初めて大切なことに気付くので、今までなんとも思っていなかったことが、それを聞いて、それを知って初めて重大なことだと気付く。気付いたのが今だと思っていて、その重要性に気付き始めて、もしかしたらちょっと遅いかもしれないけれど、少しでも長くこの地域にしかない文化、伝統を引き継ぐ源の方言を大切にしていこうと思ったのではないかと思います。

関根 私はアイヌの若者の代表なわけでも何でもないので、私はきっとただ単に地元だったり、家族とか、私を育ててくれた人だったり大切にしたいなと思います。その人たちが一所懸命、その人たちだけではなく私の先祖とか、本当にずっと伝えられてきたものがなくなる。一所懸命、文化を育ててきたアイヌ語がなくなるのはすごく悲しいことだし、きっとほかの言語でもそうでしょうが、自分の言語を知ると、考え方とかも本当に一つの単語でも日本語とかでスパッと訳しきれないような言葉がたくさんあって、そんなたくさん色を持っている言語みたいなものがなくなっていくのはすごく悲しいし、それを知らないまま年を取っていくというのは、自分の人間としてのチャンスを逃したなと感じます。

私はアイヌ語に限らず、今回こうやって参加されているたくさんの方の言語の方が、本当にその言語が社会的に認められて当たり前のように存在できるようになったら、ア

イヌだけとか宮古だけとかではなく、日本全体とか世界にも絶対に何かを渡せるようなものになると思います。異文化が集まると、やっぱり社会が活性化するみたいな感じではないですが、言語に今更とか、今からとか、いつ始めるとかは余りきつと関係なくて、私は自分を豊かにしたいから、正しい人でいたいから言語を学ぼうと思っています。

石原 そうというようなことを自分のクラスメイトとかにも話したいということがありますか。別に自分は自分、友達は友達という形ですか。

関根 自分は自分というか、自分はそうありたいし、私はきつとそうある人が、私自身、格好いいなと感じるので、せつかく日本にこんなにたくさんの言語があるのに、それを知らない日本社会なんて本当に乏しいものになってしまう。こんなに豊かなものがたくさんあって、文化も言語もたくさんの人がいて、それをちゃんと認められる社会が理想だと思うので、そういうのを知るにはやっぱり自分が大切にしたいものがあればいいと思っています。その方も例えば沖縄の何かが大切でそれを残したいとか、そこに自分が求められているみたいな感覚があれば、きつと言語も学ぼうと思えるのではないかと、何かすごく上から目線なのだと思います。

石原 Saraさん、お願いします。

Sara 南サーミ語はやはり今、どんどん話す人が少なくなっていて危機的な状態になっている。だから、いま私は学んで継承していきたいという思いを持っています。

石原 ありがとうございます。今日の会場を見てもおそらく気付いたかと思うのですが、こういう時に大体若い人の参加はすごく少ないです。若い人たちが参加したいと思うような工夫としてはどういものが考えられますか。イベントでもいいですし、若い人たちが参加をしたくなるような言語継承活動というのは、どういうことが可能なのか、もしアイデアがあれば…。

関根 きつと私自身、こういう場に立たせていただいたり、何か自分がアイヌとして

伝えなければいけない立場に立ったりした時に、すごくそこに意欲が湧くというか…。なので、若い人たちがほんの少しでもいいので、どこかの誇りを持って、何か誰かに伝えるということができる場所、できる時間とかを取り入れたら、すごくやる気にもなるし、その人たちの練習にもなるし、いろいろなプラスの効果があるのではないかと思います。

石原 砂川さん、どうですか。

砂川 私が考えるのは、さっきの質問で言ったのですが、学校の教育課程として、こういう方言とかに関わることが少なくて、こういうこともできれば学校の授業とかで携わらせていただくとか、そういうふうに参加したら、もしかしたらその中で興味を持って「もっと知りたい」と思ってくれる人がいるかもしれないので、学校の教育の一環としてこういうことに参加するのもいいのではないかと思います。

Sara こういうような日本の場に来て、初めはちょっと戸惑っていましたが、最初はノルウェーの人たちももっとサーミの文化を学ぶべきだし、知っていればもう少し興味を持ってもらえるのではないのでしょうか。

もう一つ、サーミの歌手とか役者さんがいま結構、北欧でいます。そういう面でも彼女たちや彼らに憧れて、サーミの文化に興味を持ってくれる人が増えているので、そういう人を呼んだらどうでしょうか。

石原 ありがとうございます。関根さん、何か追加で。

関根 すごく個人的なことになってしまうのですが、いいですか。私はやっぱり人の縁がすごく大切に、昨年もこの言語サミットに少しだけ関わらせてもらったのですが、昨年お会いした方と今年お会いできるのがうれしくて、日本国内も、サーミもですが、一緒に何か頑張れそうな文化であったり言語であったり、そのグループ同士が今回だけではなく、もっと何かの関りがあれば私が感じている、このうれしい気持ちを1回参加した方が感じるという連鎖が起きるのではないかと思います。

石原 ありがとうございます。実は個人的に思っている夢ということでもないですが、ハワイの人たちと沖縄は意外とつながっていますし、それからマオリとアイヌもかなり一緒にイベントとかをやっているようですので、そういうハワイ、アイヌ、沖縄、宮古、それにサーミも含めて、若者たちのイベントがあればすごいいいですかね。世界のウチナーンチュの若者大会というのがあるのですが、そういうのがあればすごいいいかなと思います。これはどこまでも個人的な、今思い付いたことです。

それでは、少し時間がたってきましたので、まとめに入りたいと思います。周囲にいる大人や取り巻く社会が、自分たちが言語を継承していく観点からどうあってほしいか。どういう態度で接してほしいかというのがありましたら、一言ずつでもお願いします。

砂川 私がそうであったように、学校や地域の団体、組織が宮古方言に関わるチャンスの中高生や若い人たちに与えてくれて、また周りの大人たちが、私の祖父母みたいに孫とかに方言を教えてくれたり、興味を持たせてくれたりするようなことをやってくれたらいいなと思います。

石原 関根さん、お願いします。

関根 すごく偉そうなことを言ってしまうかもしれないのですが、私は何か大人たちにしてもらいたいというよりは、自分が何かをしたいという感覚が強くて、何かをしてもらおうという、自分に責任を持たないようなことは、もう余りできないかなと思っています。なので、私はきっと一杯駄目なところもあって、アイヌのことを始めようとする人、いろいろなことを始めようという人も絶対に一杯失敗するのですけれど、そこを優しく見守っていただければと思います。それぐらいです。

Sara 周りの周囲の人たちが私たちを特異な目で見ずに、普通に同じように扱ってほしい。私たちは他の人と同じですから、同じように扱ってほしいです。

石原 それでは、まだまだ聞いてみたいこともあるのですが、まとめということでや

ろうかと思ったのですけれど、あと一つ、きょうの午前中の国立国語研究所の田窪所長の御講演の中にもあったのですが、年配の方というか、大人の人が我慢するべきだと。若者が言葉を使うときに、敬語とかそういったものがなくて、タメ口ということではないのですが、友達に話す、もしくはごく親しい人に話すような話し振りでやってしまうと、それに接している年配者からは叱られてしまう。そういう話はよく聞いています。自分は使う必要はない。使って叱られるぐらいであれば使わないというのがあって、そういった意味では、すごく全体的に損しているということがあって、せっかく若い世代が使おうとしているのに、使うことによって叱られてしまうといったことをよく聞いています。そういうことに関して、若い世代として何かそれに関して言いたいことはありますか。

砂川 言いたいことは特にないのですが、やっぱりこれを継承という意味で私たちに教えてほしいとも思いますし…。怒られる…、そうですね、そこは継承していくという意味で、温かい目で見守ってほしいとは思いますが。でも、宮古方言には方言の中にも敬語とかがあるみたいなので、そこを私たちがもっと学んで使っていったら大丈夫ではないかなと思います。

関根 アイヌ語で話して、年配者に怒られるということですよ。きっと私はその経験をしたことがなくて…。

石原 年配者に対しては当然、敬語を使うものだというのがある中で、アイヌ語の中にも敬語があったとしても、若い人たちは敬語が使えない。そこで、年配者に話すときに敬語ではなくて、友達とかに話すような形で話してしまう。そういうことをすると、年配者からは「おまえ、無礼なやつだ」みたいな形になってしまうということです。

関根 もし、私のような立場にいたならば、きっと。すごく個人的な意見になってしまうのですが、言葉だけではなくて、もっといろいろなコミュニケーションがあって、先ほどの話でやっぱりそういうこともあるとは思いますが、そんなことよりもちゃんと人としてコミュニケーションをとって、きちんとした関係であるなら

ば、その人にはそんなに強く当たることも少ないと思うし、私たちがただ言われて怒られただけではなくて、私たち自身も絶対に敬意を見せなければ駄目で、私たちよりも長い間生きて、たくさんの知恵を持っている方たちなので、ただ怒られて、やめるというのは違うかなと。もっとちゃんと精神的な誠意を見せるところもあるのではないかなと思います。

長谷川 日本語と違ってノルウェー語やサーミ語には謙譲語とか尊敬語というものが存在しないので、質問を伝えてもピンとこなかったのですが、ただ、「じゃあ、例えばおじいちゃんに…」と話したら、次のような回答でした。

Sara そういう経験は全くありません。サーミ語で年配の方と話しても、個人的にはないです。

石原 ありがとうございます。それでは最後の質問としますが、先ほど関根さんが言及していましたが、萱野茂さんが亡くなった 2006 年に、NHK の ETV 特集で「ある人間（アイヌ）からの問いかけ～萱野茂のメッセージ～」というのがあって、その中で私がすごく感銘を受けた言葉に「言葉こそは民族の証」というのがありました。10 代の若者として「言葉こそが民族の証だ」ということで、みゃーくふつ、アイヌ語、サーミ語というのは自分にとって何なのかということがありましたら、教えていただけますか。

砂川 私にとって宮古方言は、やっぱり生まれ育った地域独特の言葉であるので、同じ地域で生まれ育った人たちの心をつなぐというか、連携ではないのですが、つながりが言葉一つでとても分かるというか、そういう仲間意識ではないのですが「私の故郷はここなんだ」とか「同じ仲間がここにいるんだ」というのを強く感じさせてくれる、大切な言葉だと思っています。

石原 関根さんにとってアイヌ語とは何ですかという、すごく抽象的な質問ですが。

関根 私はアイヌも日本人の血も入っているのですが、よく日本の血も入っていてア

アイヌとしてとか、そこでいろいろ質問されたりもするのですが、いろいろな言語で育った私が私なので、アイヌ語も話せはしないのですが「自分のものだ」ぐらいの感覚があるんです。自分はまだ本当に勉強も始めたばかりだし、まだ本当に何もできないのですが、自分がやらなければいけないことだという感覚が少しあって、やはりアイヌ語というのは文字を持たないものなので、より一層言語と文化とかも密につながっていて、そんな環境の中で言語も文化も触れながら育ったので、やっぱりアイヌ語というのは自分のものであって、先ほども少し話したみたいに自分はアイヌだからこそ、人として正しくありたいというのを思わせてくれる、自分の軸みたいなものがアイヌ文化なんだなと最近感じています。

Sara 冒頭にもお話ししましたがけれども、私にとってサーミの言語も文化も自然のものであり、サーミの中で自分は生まれてきた。ですから、その中で自分の人格形成がサーミの言語であり、文化である。ですから、とても自然の中の自分の中の一部として受け入れています。

石原 予定にはない質問でしたけれど、ありがとうございました。まだまだ聞いてみたいことはおありだと思いますが予定の時間となりましたので、協議「危機言語・方言を継承するー継承を受ける立場から」を終わりにいたします。

最後に改めまして、経験に基づいた示唆に富む発言をしてくださった、パネリストの3人に拍手をお願いいたします。

どうもありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。協議の進行台本ではこんなにいろいろな質問を準備しておりませんでした。石原先生がこの場に合わせていろいろと準備してくださった結果として多くのお話を伺えました。進行の石原先生、それから通訳してくださった長谷川先生もどうもありがとうございました。